

近代語「浪漫」の成立と変遷

朴 孝 庚

1. はじめに

「浪漫」は独特な成り立ちを持っている単語である。「浪漫」という単語は近代の西洋文物の輸入とともに文芸思潮の一つとして受け入れられたが、「啓蒙主義・自然主義・事実主義」のように意味を活かした漢語の訳語にはなれず、音訳語の「ロマン主義」か、当て字の「浪漫主義」として定着した。

これまで「ロマン主義」に関する研究は数多くなされてきたが、「ロマン」あるいは「浪漫」という単語についての研究はあまり見当たらない。そこで、本研究では、「romanticism・romantic・romance」などの「ロマン」に関する用語が日本でどのように訳され、変化してきたかについて調査する。さらに、「浪漫」が「浪漫主義」という文芸思潮の一部から出発し、独自の意味領域を持つようになった過程を明らかにしていく。

2. 先行研究および研究方法

「浪漫主義」という文芸思潮は、『大辞林』によると、「18世紀末から19世紀の初めにかけてのヨーロッパで、芸術・哲学・政治などの諸領域に展開された精神的傾向」とある。なによりも個性や自我の自由な表現を尊重し、知性よりも情緒を、理性よりも想像力を、形式よりも内容を重んじたとされる。「憧憬・想像・情熱・異国趣味」などがその特徴として挙げられるが、それらの裏返しとしての幻滅・憂鬱などがヨーロッパ「浪漫主義」の特徴の一つである。また、浪漫主義の具体的な展開はイギリス・フランス・ドイツなど、ヨーロッパ各国の状況によって異なる傾向を見せている。

日本の「浪漫主義」は、1880年代後半、写実主義の展開とともに紹介され、ドイツ留学から帰国した森鷗外の『舞姫』が「浪漫主義」の最初の作品であると言われている。そして、「文学界」同人の島崎藤村・北村透谷らによって「浪漫主義」が推進され、文芸誌『明星』の歌人らがその代表とされる（注1）。1935年には新しい浪漫主義を模索する動きとして「日本浪漫派」が登場した。国粹主義的な思想が強いともいわれており、その同人には亀井勝一郎、太宰治などがある。さて、日本での先行研究は主に文芸思潮としての「浪漫主義」、つまり、文学・美術・音楽・建築の諸分野での主な作品と作家に関する研究が多かった。

文芸思潮の「浪漫主義」ではなく、「浪漫」についてのことばに着目した先行研究としては金敬鎬（2003）がある。金敬鎬（2003）によると、「浪漫」は、明治期に日本で「roman」の音訳語として造語されたものであるとされていたが、中国の宋時代の漢詩

などにその語形が見えるという。そして、「縦情・任意」「猶瀾漫」などの意味で、現代の「浪漫」とは異なる意味で用いられていたと述べている。この論文は、「浪漫」について語学的な分析を試みた点で大きな示唆を得ることができるが、考察した資料が辞書の見出し語と用例に限られており、成立と定着に関していくつかの疑問が生じる。「定着した過程」を調べるためには、「ロマン」がいかにして一般の人々に自分の感情や情緒をあらわす言葉として受け入れられてきたかについて考察しなければならない。辞書の見出し語の用例だけではその定着した過程が不明であるので、それだけではなく、一般の新聞の記事を検索して調査することがもっともそれを知るための有効な方法であろうと考える。したがって、本稿では、ロマンを含む関連用語として調べる範囲を広げ、新聞の用例を中心に考察することにする。

ところで、ロマンの関連用語として「ロマンス・ロマンチック（ロマンティック）・ロマンチズム（ロマンティシズム）・浪漫・浪漫主義・浪漫派・浪漫的」などがある。朝日新聞（注2）の創刊号から1989年までの用例を中心にこれらのことばの変遷の過程をたどっていく。朝日新聞の用例の他に、「新潮明治の文豪・大正の文豪」（CDrom）、総合雑誌『太陽』（CDrom）、明治期と大正期の新語関連辞書などから補足して考察することにした。

3. 「浪漫（ロマン）」ということばの成立

3.1 明治期

3.1.1 ロマンズの輸入

今回、調査した中でもっとも早い日本での用例は、西周が『明六雑誌』第25号（1875年）で紹介した「ロマンス」であり、その用例は以下の通りである。

(1)雄を文壇に競ふに至てはロマンス（稗史）フェーブル（戯乗）亦備はらざるは莫し

「稗史」は、正史ではない民間の歴史書あるいは作り物語の意であり、現代の「恋愛物語」を連想する「ロマンス」とは異なる。日本の資料ではないが、『英華字典』（注3）では次のように紹介している。

○ Romance 怪誕・小説・荒唐

○ Romantic, pertaining to romance 怪誕嘖・荒唐的・荒唐・假裝的・狂謬・幻・怪異

『英華字典』では、romance と romantic が見出し語として登録されていた。現代の「愛・恋愛」などの意味についての記述は見当たらず、「荒唐で怪奇な物語」として理解されていたようである。また、坪内逍遙も『小説神髓』（1885年）の中で次のように述べている。

(2)小説は仮作物語の一種にして所謂奇異譚の変体なり。奇異譚とは何ぞや英国にて

羅ーマンスと名づくるものなり（注4）

坪内のいう「羅ーマンス」は「romance」のことであり、もともと空想的、冒険的、伝奇的な要素の強い物語を指す場合に使われていた。特に中世ヨーロッパの恋愛・武勇などを扱った物語をいう。romanceの語源は、古代都市「roma」に「～的なもの」を表す「ance」がついてできたことばで、「ローマらしきもの」を表していたとされる。中世ヨーロッパでは、文語の古典ラテン語に対し、口語に用いた俗ラテン語を「ローマ語」といい、ローマ語で書かれた物語を「romance」といった。オックスフォード英語辞典では、「初期のロマンスは騎士道をテーマにした母国語（ラテン語ではなく）の詩を表している。ロマンチックな愛を中心としたジャンルを指すようになったのは17世紀半ばから」と述べている（注5）。日本に輸入された当時は「恋愛」の物語ではなく、物語性の強い文章に「ロマンス」という用語を当てたとと思われる。

3.1.2 明治期の新聞と雑誌の用例

朝日新聞では1891年4月21日、バイオリン協奏曲の曲名として「ロマンス」が初めて登場する。



〈図1〉1891年4月1日朝日新聞 文化面

明治期の朝日新聞では「ロマンス・ロマンチック（ロマンティック）・ロマンチズム（ロマンティシズム）・浪漫主義・浪漫派・浪漫的」の形で延べ18回用いられている。音楽・文学・演劇など、文芸欄の用例しかなかった。次は物語の意味で用いられたと思われる朝日新聞の「ロマンス」の用例である。

- (3)小説予告 ゆるさぬ関 開国五十年といふ記念すべき歳を迎へんとするに方つて、先づ第一に嘉永安政のローマンスが回憶せられる。その片影を捉へて。彼理度来前の江戸一特に一部士人を彷彿せしめやうと試みたのが即ち是で。

（朝日新聞1907年12月8日）

次に、総合雑誌『太陽』では1901年に1回、1909年に35回検索された。朝日新聞の用例と同様、音楽・文学・演劇など文芸欄の用例しがなく、ロマンチズム・ロマンチックの形で用いられていた。例として以下を挙げる。

- (4)唯個人各自の『我』あるを認むるもの、十九世紀末の思想に對して何等の對比ぞや、

遠くは『ロマンチズム』の運動も、近くはヘンリー、マツケーの無政府主義も、ニーツエが是の個人主義の極端なるに (太陽1901 高山樗牛)

雑誌としては、夏目漱石が1907年1月『ホトトギス』に連載した『野分』で「浪漫派」の用例が登場する。いわゆる当て字「浪漫」の最初の用例である。

(5)十八世紀末のゴシック復活もまた大なる意味に於て父母の爲めに存在したる小時期である。同時にスコット一派の浪漫派を生まんが爲めに存在した時期である。即ち子孫の爲めに存在したる時期である。

また、夏目漱石が同じく1907年に朝日新聞の文芸評論で「浪漫派小説」という用語を使って以降、朝日新聞では「ロマンス (2)・ロマンチック (4)・ロマンチズム (6)」(注6)のカタカナ系は12回、「浪漫主義 (3)・浪漫派 (1)・浪漫的 (2)」などの漢字表記の「浪漫」系は6回用いられた。明治期朝日新聞の用例では「ロマン主義」の「ロマン」ということばが独立したことばとして使用された用例は見当たらず、「ロマンス・ロマンチック (ロマンティック)・ロマンチズム (ロマンティズム)」などの形で用いられていた。同様に、「浪漫」という漢語も「浪漫+○」の形で用いられ、「浪漫」だけ独立したことばとして使われた用例はなかった。

一方、先述の通り、夏目漱石は「浪漫」の当て字を初めて使ったとされ、『三四郎』『彼岸過迄』などの作品でも「浪漫的 (ロマンチック) アイロニー」「浪漫的自然派」「浪漫的な人間」(以上『三四郎』の用例)「浪漫趣味 (ロマンチック) の青年」「二人の浪漫を織っている」「そこが浪漫家だけあって」「浪漫的探険」「勝手に浪漫が急に温味を失って」「浪漫ス (ロマンス)」(以上『彼岸過迄』の用例)などの、様々な用法の「浪漫」を試みている。このような例は、後に「浪漫」の意味が拡張されるのに重要な契機になったと思われる。

3.2 大正期：ロマンスの拡大と変容

3.2.1 ロマンスの拡大

大正期の朝日新聞を検索し、得られたカタカナ系の用例をまとめてみると、「ロマンス」は107回、「ロマンチズム (ロマンティズム)」は21回、ロマンチック (ロマンティック) は16回出現した。もっとも多く出現した「ロマンス」は記事で50回、広告で57回登場した。

- (6)一頭の羊の毛で洋服が一着出来る 友部種羊場視察の記 松岡場長が羊と共に我が
児を育てつつあるロマンス (朝日新聞1919年1月1日)
- (7)父を尋ねて混血美人 日下部三九郎氏が若い外交官生活中的ロマンス 二十余年前
の恋を胸に秘めた 母と共に伊太利から (朝日新聞1923年5月2日)
- (8)昔から伝はる神秘鍵ロマンス 水源は秩父山中杯とその不思議を探ぐるべく廿年前

タイトルで「ロマンス」が用いられた記事も33回あった。たとえば「多摩川水源地ロマンス・氷河ロマンス・星のロマンス」というタイトルの記事がある。「多摩川水源地ロマンス」は、多摩川水源地で繰り広げられる恋の物語ではなく、周辺の地理や文化財に関する記事である。「氷河ロマンス・星のロマンス」も恋愛の物語ではなく、「氷河」と「星(宇宙)」に関する情報が載っている自然科学の記事である。また、明治大学教授復職をめぐる内紛を述べた「明大事件ロマンス」、新聞紙法違反で発売禁止処分を受けた雑誌記事「自由党ロマンス」、昔離ればなれになった母子が戦場で偶然会った話である「戦争ロマンス」など、政治や法律に関する事件や事故の記事にも「ロマンス」というタイトルをつけていた。

「無電ロマンス」というタイトルのシリーズ記事もあり、8回にわたって無線通信をめぐって起きた、国内外の面白い話を紹介している。「野球ロマンス」という9回にわたるシリーズ記事もあり、野球のルールや選手に関する話を紹介している。その他「スポーツロマンス」、「山のロマンス」など趣味や旅行に関する記事もある。上記の例は「ロマンス」を「○○の驚くべき話」「○○の波乱万丈」「○○に関する面白い話」などで言い換えられる。輸入期の「ロマンス」の意味、つまり恋愛の物語ではない「ロマンス」が続いているといえる。

一方、この時期のもう一つの特徴は、書籍と演劇の広告に「ロマンス」が多数用いられたことである。代表的なものとして『海のロマンス』がある。『海のロマンス』は船に乗って世界を一周する冒険談であり、「ロマンス」の持っていた夢・冒険などの意味領域を効果的に表しているタイトルだといえる。朝日新聞の広告欄に9回登場し、出版会の動向を報告する記事にも8回登場する。この本の大成功以来、「○○ロマンス」という形の広告は急増する。「探偵ロマンス・正史上のロマンス・待合ロマンス・売春ロマンス・芸者ロマンス・下宿屋ロマンス・受験ロマンス・英語単語ロマンス」などの、本と演劇の広告が登場した。含蓄のある、インパクトの強いこういったタイトルは広告界でも大きな影響を与えたと思われる。「○○ロマンス」の形が1950年代初頭までつづく中、恋愛や愛に関する「ロマンス」の用法も徐々に増えていく。

ところで、「ロマンス」は多岐にわたって現れたのに対し、「ロマンチック・ロマンチズム」は文学・美術などの文芸関連用語に限って現れた。特に「ロマンチック(ロマンティック)」は、現代の日本語では「現実を離れ、情緒的で甘美なさま。また、そのような事柄を好むさま。空想的」という意味を持っているが、大正期の朝日新聞の用例では「ロマンチック派、ロマンティック運動、ロマンチックな管弦楽 ロマンチックな佳曲」など、もっぱらクラシック音楽や文学、文芸思潮などの分野の用例しか現れなかったのも、この時期の特徴と思われる。

3.2.2 「浪漫」の変容

漢字表記の「浪漫」系の用例は明治期からの用例と同様、文芸思潮「浪漫主義」の関連

用語として持続的に用いられていた。文学・音楽・美術についての記事に「浪漫主義」は16回、「浪漫派」は12回用いられた。「浪漫期・浪漫哲学・東京浪漫会」なども文芸思潮の関連用語として用いられた。

「浪漫的」は6回登場し、美術評論で用いられた「浪漫的」が2回、「浪漫的主義・浪漫的英詩選・浪漫的時代・浪漫的な曲目」などの形があった。カタカナ系の「ロマンチック」とほぼ同じ用い方である。このような中で、以下のような異質な用いられ方をした例があった。

- (9)もとより毎日毎日朝にゆうべに二人が鼻突つきあいしている結婚生活において、最初の浪漫的恋愛時代のように毎日相見るとに胸とどろかせては第一命つづかない。
(朝日新聞1921年10月13日)

「浪漫的」に「ロマンチック」ではなく「らうまんてき」というルビがついていることで明治期の用例とは変わってきていると思われる。また、文芸思潮とは直接関係のない用法も見えはじめた。「女天下の島、八丈島より 浪漫男の失敗」(朝日新聞1917年6月18日)という記事のタイトルであり、文芸思潮の「ロマンティズム」とは関係のない用例と思われる。

「放浪漫記」「浮浪漫語、放浪漫語」という記事のタイトルも検索された。このような例は「浪漫」ではなく「放浪・浮浪」にポイントがあると思われるが、「浪漫」という形の2字漢語が海外から輸入された「浪漫主義」とは少し離れたところで独立的に使われる兆しが見えたといえる。

3.3 昭和期：ロマンスからロマンへ

昭和期に入ってから1930年代後半までの「ロマンス・ロマンチック (ロマンティック)・ロマンチズム (ロマンティズム)・浪漫主義・浪漫派・浪漫的」などの関連用語の用い方は、大正期と変わらない傾向であった。ただ、漢字表記の「浪漫」の用法が少しずつ拡大される様子がみえる。朝日新聞に満州文学の特集記事で紹介された『満州浪漫』という雑誌がある。1938年から満州で発行された大衆的な文芸雑誌である。従来の朝日新聞や総合雑誌『太陽』で用いられた「浪漫」の用例は「ロマンス (ローマンス)・ロマンチック」などのルビがついており、外来語としての認識が残ってどこか異質な雰囲気を持っていたと思われる。しかし、大衆的な文芸雑誌のタイトルとして、ルビ無しで用いられたということは、「浪漫」が日本の読者層に「理解語彙」として位置づけられ、ロマンティズムに対する理解がない人でも大体のイメージは浮かべられるようになったことを意味している。

太平洋戦争の影響により、1943年から1948年までの朝日新聞検索からは関連用語を見つけることはできなかった。1950年代初期まで「〇〇ロマンス」の用例は続いて登場するが、1952年以後変化が現れる。「ロマン」が登場したのである。

- (10)「聖人を主題にロマン うれしノーベル文学賞」 (朝日新聞1952年12月3日)

- (11)白井よ、古風な心理小説などやめて再び雄大なロマンの世界にかえれ。

(朝日新聞1952年12月17日)

1950年代にあらわれた「ロマン」は「雄大な、規模の大きい、英雄的な」などの表現と一緒に用いられる場合が多い。従来「ロマンス」が持っていた意味領域の中の「夢・目標・冒険などに対する憧れ」が「ロマン」に移ってきたとも思われる。1950年代から「ロマンス」は主に現代の「恋愛物語」をあらわすようになった。1950年代中盤のヒット映画から流行した「ロマンスグレイ」も、こういった変化になんらかの影響を及ぼしたであろう。

続いて1960年代は女性の化粧品、デパートの広告にも登場した。1970年代から用例が増える傾向を見せる。本格的な商品資本主義時代の到来とともに「ロマン」も日常生活に近くなった。次の画像は1970年代初期の化粧品のポスターで

〈図2〉朝日新聞広告1971年9月24日



〈図3〉朝日新聞広告1972年3月26日



ローマ字「roman」がはじめて登場した。

1970年代の増加傾向に大きな影響を及ぼしたのは「ロマン・ポルノ事件」である。1972年1月28日にはじめて「日活のポルノ」(注7)事件として記事が載り、1972年に53件の記事が検索された。1973年にも7件以上の記事があった。

1970年代後半、「ロマン」は「民族・歴史・男」などの単語と一緒に用いられることが多くなった。

(12)ふたつのロマン 民族の歴史を問う契機に (朝日新聞1976年3月17日)

(13)隣国のロマンに熱い視線 韓国美術五千年展 写真特集 (朝日新聞1976年7月10日)

(14)男のロマンを求めて 梶原一騎さん_マンガの前線 (朝日新聞1977年3月15日)

1980年代以降は旅行に関する商品広告や番組の広告に多く用いられるようになった。

(15)カナダシルバーの浪漫の旅、若やいで祝う、熟年 (朝日新聞1981年3月30日)

(16)スペシャル番組「オーパ! 神秘の宝石は語る - 開高健スリランカのたび」『地球浪漫 special』 (朝日新聞 1986年7月12日)

1950年代半ばから徐々に増えはじめた「ロマン」と「浪漫」は、用例の増加とともに「ロマンティズム」とは直接関係のない、独立した用法で用いられるようになったといえる。また、用例の増加とともにカタカナ「ロマン」と漢語「浪漫」の区別は大きな意味を成さなくなってきた。

次は、全体的な推移と用法の変化についての考察にうつりたい。

4. 時代的出現の推移

カタカナ「ロマン」系の用語「ロマン・ロマンス・ロマンチック（ロマンティック）・ロマンチズム（ロマンティズム）と漢語「浪漫」を含めた形の「浪漫・浪漫主義・浪漫派・浪漫的・浪漫性」などの用例の延べ語数の推移は次の通りである。

朝日新聞では1891年に初めてクラシック音楽関係の「ロマンス」が登場した。以来1910年代の大正期に「荒唐で怪奇な物語」あるいは「波乱万丈・冒険」などの話を意味する「ロマンス」が多く用いられた。1930年代まで同様の様子が続いており、頻度も高くなっている。しかし、太平洋戦争と戦後の1940年代から1960年まではあまり用いられていない。1970年代に急激に用例が多くなるのは「ロマンポルノ」事件があり、毎日のように新聞紙上をにぎやかにしたからである。以後、平和な消費時代がつづき、旅行や商品の広告に頻繁に用いられるようになった。

なお、カタカナ系の用語と漢字表記系の用語の時代的推移は以下の通りである。

〈表1〉朝日新聞 ロマン・浪漫関連用語の出現推移

〈表2〉朝日新聞 ロマン・浪漫関連用語の内訳

	カタカナ系の延べ語数	漢字表記系の延べ語数
明治期	12回	6回
大正期	144回	40回
昭和期	300回	73回

「ロマン」と「浪漫」が独立した名詞として用法を持つようになった過程には、日本の訳語生成のノウハウが集約されていると思われる。輸入期に「romanticism」を、見慣

れない「ロマン」とすでに～ismの訳語として定着していた「主義」を結合させた「ロマン主義」という形で作りだした。それから「ロマン」には漢字「浪」と「漫」が当てられた。「romantic」も「浪漫+的」という形で定着することになる。日本人が近代の文物を受け入れるときにもっとも馴染みのある二字漢語の構成になってから「浪漫」は「浪漫詩」「浪漫文学」「浪漫性」「浪漫男」などと造語力を持つようになる。

一方、「浪漫」は「roman」の音訳語として作られたという一般的な説についても再考の必要がある。実際、輸入期の日本と中国の辞書から確認できる形は「roman」ではなく「romance」である。輸入期から1950年代半ばまで「ロマン」と言う形はあまり見当たらず、「ロマンス」という言葉が広い意味領域で用いられた。これらの事実から「roman」の形で入ってきたわけではなく、「romanticism」と「romantic」の形で輸入され、「浪漫主義」「浪漫的」という当て字を得て広められ「ロマン」あるいは「浪漫」が独立したという過程を想定することができる。

フランス語の「roman」に現在の「浪漫」と「ロマン」に相通じるところがあり、「浪漫」はフランス語「roman」の音訳だとすれば上記の仮説は間違ったものになってしまう。しかし、朝日新聞の用例を通して確認できた「ロマンス」の時代、また、本研究では本格的に扱うことができなかった韓国語の「浪漫(낭만/ナンマン)」と「로망/ロマン」の違いなどを考えると、単純な音訳語の成立とは言いがたい問題が「浪漫」にはあるような気がしてならない。

5. おわりに

本研究では、「romanticism・romantic・romance」などの「浪漫(ロマン)」に関する用語が日本ではどのように訳され、変化してきたかについて調査した。ロマンの関連用語は「ロマンス・ロマンチック(ロマンティック)・ロマンチズム(ロマンティズム)・浪漫主義・浪漫派・浪漫的」などがある。

輸入期の日本と中国の辞書から確認できる形は「roman」ではなく「romance」であり、「荒唐で怪奇な物語」という意味で用いられた。当て字「浪漫」の初出は、夏目漱石が1907年1月『ホトトギス』に連載した『野分』の「浪漫派」とされる。以来、明治・大正期には主に文芸の分野で用いられてきた。文芸の他は、恋愛を含む物語性の強いものに「ロマンス」という用語を使用した用例が多い。昭和期に入り、漢語「浪漫」の用例が少しずつ拡大されるが、「ロマンス・ロマンチック」などのルビがついて用いられた。カタカナ「ロマン」が用いられるようになったのは1950年代以後のことであり、「ロマン」は主に「夢・目標・冒険などに対する憧れ」などの意味で用いられ、「ロマンス」は主に「恋愛物語」をあらわすようになり、意味において区別が生じる。つまり、最初から「roman」の形で輸入され「浪漫」と翻訳された訳ではなく、「romanticism」と「romantic」の形で輸入され、「浪漫主義」「浪漫的」という当て字を得て広められ「ロマン」あるいは「浪漫」が独立したと思われる。

今回は調査の対象とした「ロマンス・ロマンチック(ロマンティック)・ロマンチズ

ム（ロマンティズム）・浪漫主義・浪漫派・浪漫的」などの関連用語の数が多く、明治期に輸入されてから昭和まで、単一の研究としては長い期間の推移を追う形で行われたので、個々の単語の変容や時代がいかに反映されているのかについて十分な考察を行うことができなかった。様々な様子を見せている用語であるため、今後の課題は多く残されている。

一方、韓国の最初の用例は文芸雑誌『泰西文藝新報』第4号（1918年10月26日）「最近의 泰西文壇」で紹介された文芸思潮「浪漫主義（랑만주의）」である。1920年に創刊した東亜日報の用例の調査から1920年5月3日に「獨逸의 浪漫（로－만틱크）樂派의 先覺者」、1926年12月5日に「形式보다 内容, 浪漫보다 現實, 人工보다 自然을, 重히 너기고 힘쓴다」という文があり、1950年代まで文芸思潮との関連用語として「낭만주의（浪漫主義）・낭만적（浪漫的）・낭만（浪漫）」などの形が輸入され、用いられてきた。1930年代から「로망（ロマン）」の用例が見えるが、文芸思潮の「浪漫主義」と同じ意味で用いられていた。1950年代半ばから、現在の「実現可能性は低いが、希求する、あるいは憧れるもの」という意でもっぱら使われるようになっていった。

「浪漫」と「ロマン」が音の上では区別できない日本語より、「浪漫（낭만／ナンマン）」と「로망（ロマン）」という、音で区別されてしまう韓国語のほうが、言葉の輸入と定着過程においての様々な様子が観察できると思われる。今後は、韓国語の「浪漫（낭만／ナンマン）」と「로망（ロマン）」についても調査を行う一方、今回朝日新聞に限定した資料を他の分野に広げ、社会的・文化的な「浪漫」の変遷についても研究したい。

【注】

- (注1) 主な作品としては樋口一葉の短編小説『たけくらべ』（1895年）、島崎藤村の詩集『若菜集』（1897年）、国木田独歩の小説『武蔵野』（1898年）、与謝野晶子の歌集『みだれ髪』（1901年）などがある。
- (注2) 朝日新聞の記事データベース「聞蔵Ⅱビジュアル」サイトで創刊号からキーワード検索を利用し用例を抽出した。http://database.asahi.com/library2/
- (注3) 『英華字典』は、英語と中国語の対訳辞書で、宣教師ロブシャイトが1866年から69年にかけて、作成し香港で刊行した。のちの英和辞書編纂に大きな影響を与えた。
- (注4) 傍線は筆者による。以下の用例の傍線も同様。
- (注5) オックスフォード英語辞典の「romance」の項目は、以下のとおりである。
originally denoting a composition in the vernacular as opposed to works in Latin. Early use denoted vernacular verse on the theme of chivalry; the sense 'genre centred on romantic love' dates from the mid 17th cent.
- (注6) () 中の数字は用例の数である。
- (注7) 「日活ロマンポルノ」とは、1971年から1988年にかけて日活（1978年に社名変更し『にっかつ』）で映画制作された日本の成人映画のことである。「日活ロマンポルノ事件」は1972年に映画倫理委員会が審査した日活の成人映画が、刑法の猥褻図画公然陳列罪容疑で起訴され、刑事訴訟にまで及んだ事件である。起訴された被告は、全員無罪が確定した。

【参考文献】

- 沖森卓也 (2017) 『日本語全史』 ちくま新書
_____ (2011) 『図解 日本語の語彙』 三省堂
- 樺島忠夫 (1984) 『明治大正新語俗語辞典』 東京堂出版 p 333
- 総郷正明・飛田良文編 (1986) 『明治のことは辞典』 東京堂出版 p 183, p 289, p 310
- 陳力衛 (2005) 「新漢語の現代」 『概説現代日本のことば』 朝倉書店 pp 32-48
- 米川明彦編 (2002) 『明治・大正・昭和の新語・流行語辞典』 三省堂 pp 605-606
- 金敬鎬 (2003) 「음역어 “낭만” 의 성립과 정착 과정에 대한 일고찰」 『일본어학연구』 8 한국일본어학회 pp 15-25
- 신현하 편 (1996) 『日本文學史』 학문사 pp 178-182
- 이자호 (2017) 「한·중·일의 근대어휘교류에 관한 연구-삼페인의 표기와 개념-」 『日本語學研究』 52 한국일본어학회 pp 53-64
- 이한섭 (2014) 『일본어에서 온 우리말 사전』 고려대학교 출판부
- 조관자 (2010) 「제국 일본의 로망과 동아시아 민족주의 - 일본낭만파에 대한 기억, 1950~1960년대」 『일본비평』 2 서울대학교 일본연구소
- 데이비드 블레이니 브라운 저 강주현 역 (2004) 『낭만주의』 한길아트 pp 9-12

〈 Abstract 〉

The formation and transformation of modern language : Focused on *Roman*

This paper is a study on how the term '*roman*' which is related to "romanticism, romanticism, romanticism" is translated and changed in meaning.

The first word related to '*roman*' is not 「roman」 but 「romance」 in the Japanese dictionary and Chinese dictionary, and the meaning of 「romance」 is 'nonsensical stories'.

The ateji 「浪漫」 first appeared in the form of 「浪漫派」 in 1907, when Natsume Soseokji used the word in his novel 『*nowaki*』 in the magazine 『*hototogisu*』. In Showa period, there were a growing number of examples of 「浪漫」 which was used with Yomigana 「*romansu/romanichikku*」.

When the Katagana 「ロマン」 was used is after 1950s, and 「ロマン」 usually meant 'a yearning of dreams, goals, and adventures, etc' while 「ロマンス」 meant 'love stories'.

To sum up, the first word introduced in Japan related to '*roman*', was not '*roman*' or 「浪漫」. 「ロマン」 was one of the Yomigana of 「浪漫」, which was derived from the usage 「浪漫主義」「浪漫的」, the translation of 「romanticism」 and 「romantic」.

(Park hyokyung)

(ばく ひょぎょん 漢陽사이버大学日本語学科助教授)